

ウルワのハンカチ

花田 宇秋

大関武蔵丸の後援会の一つに鹿児島県人からなるものがあって、会設立の起点は大関が郷土の英雄大西郷のそっくりさんにあるという。鹿児島県人の郷土愛には今更ながら感心するばかりである。

しかし、南洲翁の写真が発見され、それが従来 of 西郷さんと全く異なるご面相だったら武蔵丸鹿児島後援会の運命や如何に、気になるところである。エフタル民族のインド・アリア系説を説かれた故榎一雄博士は、出土した一葉のエフタル人画像がトルコ系の顔立だったことに衝撃をうけられ、その研究成果を永く世に問われなかった。百聞一見に如かずとはよく言ったものである。

閑話休題。ところで、イエス様はどのような顔立だったのだろう。「ヴェロニカのハンカチ」はともかく、このことに関する信頼に足る文献資料は残念ながらないと聞く。「残念ながら」とは歴史学を専攻する私の嘆息であって、他の人々にとっては必ずしもそうではないかも知れない。芸術家にとっては、むしろ文献資料の欠如は正に天の配剤、このことが古今の大芸術家をして数多のイエス像を輩出せしめた最大の理由であろう。黒いイエス、白いイエス、幼いイエス、老けたイエス、怒のイエス、悲しむイエス、苦悶するイエス——など、ダ・ヴィンチ、ミケラ

ンジェロからルオーに到るまで、天才芸術家たちの作品がそれを物語っている。

しかし、写真は不可能としてもイエスの容貌を具体的に記した絵画・文献資料が発見されたらどうだろう。これまでの多くのイエス像は、その作者の、あるいはかれの生きた時空のキリスト信仰の証としての、あるいは宗教芸術としての価値は失わないかも知れないが、何か迫力を欠いたものになることも確かである。事実はそのほど重いものだ。

さて、七世紀のこと、あの世でイエスに会った人がいた。その人の名はイスラムの預言者ムハンマド。かれがある夜天使ガブリエルの先導でメッカのカーバ神殿から天馬ブラークに跨ってエルサレムに飛来した。いわゆるムハンマド唯一の奇跡体験“夜の旅”（イスラー）である。次いでかれは、ソロモンの神殿の廃趾の岩から天に向かって延びる光の階段を昇って天界に至り各天界で先行する諸預言者に謁し、更に天国に入って善男善女に会った。そして遂に宇宙木に到達してそこで神の声を聞いた。その後、天国・天界を経て階段を降り、その夜のうちにメッカに舞い戻った。

以上がかれの天界飛翔体験（ミラージ）の粗筋である。諸預言者についてムハンマドは次のように語っている。「アブラハムが自分に一番よく似ていた。モーセは赤ら顔で長身瘦軀、しかも鉤鼻だった。マリヤの子イエスは色白、中肉中背で髪はまっすぐ、顔はそ

ばかすだらけだった。まるで今しがた風呂からあがったような容貌をしていた。かれの髪は濡れているように見えたが水はついていないのだ。汝らの中ではウルワ・ブン・マスウードが一番かれに似ている。」〔イブン・イスハーク（西暦767年没）著『預言者伝』〕

ムハンマドのような三界を旅した超人の語ることだから、案外このイエス像は事実なのかも。そこで一番よく似ているといわれたウルワなる人物について調べた。しかし、残念ながらウルワの経歴以外は史料は黙して語らず、「ウルワのハンカチ」中の像を鮮明にすることはできなかった。尤もキリスト教からすれば、『預言者伝』は『外典・偽典』の外のものであるから問題外の外であろう。ちなみに、ムハンマドのこのミーラージはメッカ時代のことであり、ウルワ・ブン・マスウードがムスリムになったのはメディナ時代の末期、従ってこの話もまゆつばもの、後世の産物か。そうであれば、どのようなイスラムの思想がイエスの顔に反映されているのかの考究が私の任務になるが、横着者故、未だに重い腰を据えたままである。

（はなだ なりあき

所員、一般教育部教授）

